

たちが新しい飼い主とめぐり会い、幸せな生活を送るチャンスを与えてくれたことに対して感謝の念を伝えること、②飼い主が手放す理由として、動物たちが問題を抱えているケースが多いが、それに対応する問題行動を更生するプログラムが充実しており、新たな里親希望者との徹底したカウンセリングの実践などによって、その飼い主に合ったペットとの出会いを導き出す役目を果たしていること、③里親を望んでも、希望者の環境やオーナーとしての適応能力が不足している場合、ペットを飼うための環境や飼い主としてふさわしいマナーなどを養う心得を促していくこともシェルターの大切な役目だということ…など。

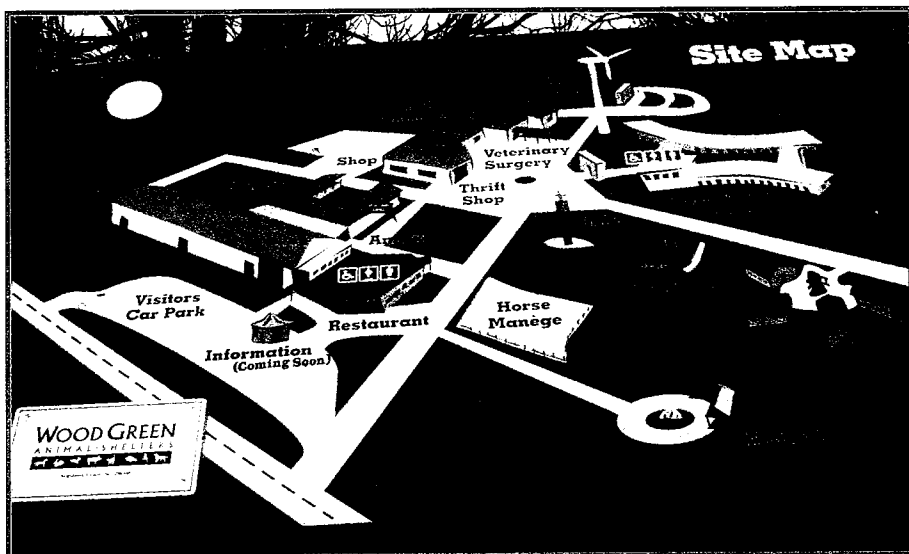
施設に働くスタッフの方は話しておられました。「私たちは皆、特別な資格があるわけではありません。私たちも最初はひとりのボランティアに過ぎませんでした。すべてが多くの経験者から学んだ積み重ねによって成り立っています。そして今はこの施設でスタッフとして働き、動物たちが新たな飼い主と出会うサポートが出来ることを誇りに思っています。」と。

英国は「愛護精神にあふれた象徴」のように称されますが、そう言われるには、それをカバーしようとする多くの経験や知恵、そして行動力を備えた人々の存在があります。人間だけが特別な存在なのではなく、生きているものすべてに感謝しながら共生していくため

に必要な最低限の制度とそれを活用する人々とそれを支える人々の協力があってこそ、初めてそのような象徴としての存在に成り得ることが出来るのではないのでしょうか。

英国の動物事情をこの身で実際に体感し、残念ながら日本と英国の動物福祉に対する考え方の落差を改めて感じずにはいられませんでしたが、この経験や考え方をどう日本の社会の中で活かすかを考える人々が、今後の私たちの社会を変えるきっかけのムーブメントとなるのだと思います。このような貴重な体験を踏まえ、私たちにできることはなにかを考えながら、今後の日々を過ごしていければ…。英国の動物福祉に触れ、改めてそう考えさせられました。

イギリスで動物保護施設をめぐり、英国の動物福祉について考える



「ひゃー、広い!!!」

今回訪れたイギリスの動物保護施設を、一目見たときの感想です。全部で五つの施設を見学させて頂きましたが、どの施設も大変広く、緑に囲まれ、環境にも恵まれていました。ウッドグリーン・アニマル・シェルターにおいては、広すぎて「受付」を探すのに迷ったほどです…。

だいたいどの施設にも、受付・インタビュールーム（個室）・犬舎（猫舎）・リング（犬の運動場）・トリミング室・クリニック（診察室）等があります。受付はとても明るく、広く、清潔感にあふれていました。インタビュールームは個室のところもあり、プライベートな話も、周りを気にせずできる環境になっていました。

そして犬舎ですが、子犬用・保護されてすぐの犬・アセスメント待ちの犬（まだ里親に出せない犬）・里親に出せる犬などに分けられ

ており、1つ1つの犬舎は屋内と屋外の両方を、犬が自由に行き来できるようになっていました。もちろん冷暖房完備で、床暖房にしている施設もありました。掃除もしやすく、1つ1つの犬舎に排水溝があり、水できれいに洗い流せるようになっていました。

また、それぞれの施設で、犬のストレスを減らす工夫もされており、どの施設でも隣同士の犬舎が見えないように、犬舎と犬舎の間はフェンスや格子ではなく、壁になっていました。ドッグズトラストでは、里親さんに見せる犬舎の前面は、ガラス張りになっており、知らない人々に対する警戒心や恐怖心がやわらげられるのか、格子より犬がおとなしいそうです。ただ、掃除（ガラス拭き?!）に時間がかかるので、スタッフ泣かせみたいですが…。そして、1つの犬舎にはほとんどが一頭しか入っておらず、たまに二頭の場合もありましたが、アークのように多頭で入っている為に起こる、犬同士のトラブルも防げているように思いました。

私が一番気に入ったのは、仔犬の犬舎にはまるで子供部屋のように、おもちゃがたくさんあったり、かわいい飾り付けがされていたり、成犬の犬舎でも普通の家庭の部屋のように、ソファやベッド、机などが置かれている犬舎があり、アットホームな雰囲気を感じられたことです。ここで犬が落ち着いてくつろいでいる姿を見れば、きっと里親さんが犬を引き取って連れて帰っても、同じように犬が安心してくつろげる空間を与えてくれるでしょう。また、大きな絵が正面に飾られている犬舎もありました。これは、怖がりな犬は人と目が合うと、隠れてしまったりするらしく、人の視線をそらさせる効果があるそうです。それから、音楽（クラシック等）を流している施設もありました。犬がリラックスするそうです。犬の運動場ですが、これまた大変広く、散歩以外でも犬が広いスペースで思い切り走り回れるようになっていて、ストレス発散できてとても良いと思いました。

その他の、トリミング室や診察室も、清潔で広く、器具なども完備されていて、とてもうらやましい限りでした。特に診察室においては、そこでほとんど毎日手術が行われるとあって、動物病院そのものでした。

さすが動物福祉の先進国とあって、見るものすべてがためいきが出るほどうらやましいものでしたが、イギリスのシェルターも初めから今のような、恵まれた環境だったわけではなく、長い年月をかけて努力してきた結果だと思います。日本の動物福祉がかなり遅れているのは事実ですが、せつかく良い見本があるのだから、真似できることは少しでも多く取り入れて、早く一歩でもイギリスに近づけるように努力していきたいです。